

武藤芳照の正義



遠くには山が見え、雪積もる北海道のうら寂しい駅のプラットフォームで、制服のオーバークーートを脱ぎ、身を包んだ初老の鉄道員が一人、冬空を見上げています。映画「鉄道員(ぽっぽや)」(1999年)の一場面だ。

強さやわやわ

1960年代、任侠映画で、我慢に我慢を重ねた後、最後にはたった一人で、巨大な力に立ち向かう男を演じ、若者たちの拍手喝采を浴びた。東映を離れ、フリーになってからは、検事、明治の軍人、家庭に憧れるアウトロウ、射撃の名人の警察官、南極越冬隊員、大石内蔵助、そして鉄道員など、さまざまな役柄を誠実にこなしてきた。過酷な自然と闘い、不条理な逆境に耐え忍び、不器用なばかりに真つすくに生き抜く姿を観客に示した。

205本目の最後の映画「あなたへ」の一場面、亡くなった妻の生家近くの写真館の窓に飾られた妻の少女期の写真に見入る刑務官の視線とたたずまいに、人生の切なさや愛情の深さがにじみあふれていた。

「強さ」ばかりを喧伝する人物像、男性像が目につく。その一方、本来律し耐えなければいけない状況にあっても、やわらかな対応をすることで、「やさしさ」を強調する人物像、男性像がもてはやされることも少なくない。

「強いやさしさ」や「やさしい強さ」の言葉に象徴されるような、今、日本人が忘れかけている真の強さ、真のやさしさを有する人、男。それをめぐりに演じた名優が一人、天に去っていった。

冒頭の「鉄道員」の一場面も、極寒の地の駅の鉄道員として、律義に鉄道と列車の確実

学生運動華やかに

(日体大総合研究所長)